ドイツ文学の傑作

武　田　修　志

(昭和62年5月18日受理)

ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1796年)
マン『ブデンブローク家の人々』(1901年)
カロッサ『ルーマニア日記』(1924年) その他
ケストナー『飛ぶ教室』(1933年)

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』

この作品のドイツ文学史上に持つ意義はよく知られている。それは，一人の若者が様々な経験を重ねて精神的，人間的に成長して行く過程を描く教養小説（Bildungsroman）という小説形態を，この長篇小説が，一つの典型として示したということである。そして，以後，この作品を模範として多くの大作がものされた結果，教養小説という一つの系譜が形造られ，それは，ドイツ文学における最も特色ある小説形態となったのである。

しかしながら，今，こういう文学史上の意義を離れて，この二百年前に書かれた小説が，直接，我々に訴えてくるものを持っているとすれば，それは一体何であろうか。あるいは，この作品は，今日の我々の心を直に摑(つか)む力を既に失っているであろうか。

この作品の魅力あるいは内容を論(あげつら)うに際しては，一つの前提を必要とするように思われる。それは，この作品を少なくとも二度読むということである。それと言うのも，今日の読者が，この二百年前の長篇小説を最初に通読するとき，その一種悠長な語り口に退屈を覚え，話の運びのある種の拙劣さに不満を感じて，十分にこの広大な作品世界へはいって行くことができないということは，大いにありうることのように思われるからである。開巻冒頭の数章を占めるヴィルヘルムの人形芝居についての長々しい思い出話は，初めてこの本を手にした読者にとっては，眠さをこらえてこれ

を聞くマリアーネにとってと同様に，退屈きわまりないものであると言ってよかろうし，例えばまた，第六巻の全体を占める「美しい魂の告白」と題された一女性の手記は，先んずる五つの巻における物語の展開と，どのように関っているのであろうか。あるいはまた，この本の最終巻は，多くの入り組んだ人間関係や出来事を，いささか性急に解き明かし，片附けて，結末を急ぎすぎていはしないか。いずれも，十九世紀あるいは二十世紀の優れた小説技法を駆使したロマンを読み慣れた我々には，何がなし不満でもあり疑問の残るところだが，しかし，ここで同時に気附かれるのは，作者自身は，こういう語り口の悠長さや小説技法の拙(つたな)さなどに一向に頓着している様子はないということである。このことは，ひとまず，この小説が18世紀末に書かれたものであり，当時としては，小説技法という点においても，むしろ水準を越えた作品と成り得ているということから，説明することができるであろう。しかし，それが主たる理由ではなかったかもしれない。たぶん，この作品の作者には，後世の読者たる我々の言う退屈だとか技法の拙劣といったものを必要以上に顧慮する気持は初めから欠けているのである。そして，作者が，ここに描き出さんとした人間群像の新しさと魅力，そして，これらの人間達が生きるところに展開する世界の意味とを深く信じていて，これらの人間群像と世界とが生きた形姿として出来上がりさえすれば，読者を慮(おもんぱか)った小説技法など小賢しい二義的問題と思われたからではないであろうか。そして，もしその通りだとすれば，この作者の態度を是認するほか，読者がこの作品世界へ本当にはいって行く道はない。この作品を論(あげつら)うに際して，少なくとも再読することが，一つの前提だと言う所以(ゆえん)である。

さて，こうして，この作品世界へはいりこむことができたとき，我々の心をまっ先に捉えるものは何であろうか。それは，ほかでもない，ヴィルヘルム・マイスターというこの主人公の，幼児(おさなご)のごとく常に全身全霊をあげて生きている姿であり，その全く卒直であけっぴろげな態度であり，つまりは，この若者の邪心を知らぬ真に純粋な人間性であろう。この青年ほど，他者に向かって，あるいはまた世界全体に対して，心を開いている人間は珍らしいと言っていいのであり，その無垢の心ばえは，人間に地位や役割でなく，何らかの人間的真実を見ようとする者には，ただちに感受され，好意を抱かずにはいられない質(たち)のものであろう。また，この若者には，いわば，生の多面性に対する繊細で豊かな感受性が育(はぐく)まれており，就中(なかんずく)，作者ゲーテもそうであったように，女性を愛するという点においてはまさに一個の天才の趣がある。彼が，己が全霊を持って愛し，あるいは，心から受け入れた女性達は数多く，また，多彩である。初恋の少女マリアーネ，イヴのごとき女性フリィーネ，傷心の女アウレーリエ，理智の人テレーゼ，理想の貴婦人のナターリエ……彼は，若き女性の愛らしさに，成熟した女の魅力に，あるいはまた，気品ある女性の美しさに――これらのどれに対しても強く心をひかれるのである。しかしながら，彼が心を寄せたのは，こういう女性たちばかりではなかったのであり，例えば，常ならぬ運命を推測させる竪琴弾きの老人や不思議な魅力を放つミニヨンもまた，彼の愛情の対象であった。この主人公の最大の関心は，彼自身の口からも

「人間にとっては，人間こそが一番興味あるもので，本来なら我々は，人間だけにしか興味を持ってはいけないものでしょう。」（二巻四章）と言われるように，ひとえに人間に向けられているのである。

このような青年ヴィルヘルムの，自己の周囲に立現われる人々に対する正直で愛情豊かなふるまいは，ほとんど彼の生まれつきのものだと言い得るとしても，しかし，この若者は，決して単なる人柄の良い富裕な市民階級出の坊ちゃんにすぎないわけではない。この青年の胸のうちには，それが明瞭な自覚を持って把握されるならば，一つの新しい人間理想にもなり得るような，人生へのある切ない願いが秘められているのである。この願望を彼は，父の死を知らせる友人ヴェルナーの手紙に対する返書の中で，初めて明瞭に表明する。

《君の生活の仕方や考え方は，無制限な所有と安易で愉快な享楽の仕方へ向けられている。そしてぼくが，そんなことになんの魅力も感じていないことは，ほとんど言う必要もないことだ。(……)

一言でいうと，現に今あるがままのぼく自身を完成するということが，おぼろげながらぼくの少年時代からの願いであり，ぼくの目的でもあった。(……)ぼくは，ぼくの市民という出自のために得られないでいる自分の本性の調和的完成ということに，どうにも抑えがたい欲求を感じている。》（五巻三章）

現にあるがままの自分自身を完成すること，自分の本性の調和的完成。いわば，一本の若木が自然の恵みを受けて，くまなく芽をふき，豊かに枝を広げて，次第に見事な樹木へと生長していくように，自己の内部の素質を余すところなく開花させて，一個の堂々たる人間へと造り上げていくこと，これこそ主人公ヴィルヘルム・マイスターの，おのが人生における最大の願望なのである。そして，これはまた，その後の近代に生きる自覚的人間の一つの理想の，極めて明瞭でかつ先駆的な表明と言ってよいであろう。産業革命とアメリカの独立宣言，そしてフランス革命の時代，これらのいずれもが人間集団の外側への拡大を表明しているとすれば，この主人公のおのが人生への願望は，個としての人間の内部への拡大を語っていると見ることができよう。ヴェルナーのような「自分の仕事を果たし，金をもうけ，家族の者と楽しみ，そのほかの世界のことには，それを利用しうる範囲外では気をつかわない」（五巻二章）平均的市民から見れば，どこかお人好しで，何を目的に生きているのか分からないような青年ヴィルヘルムは，実は，近代人にとってある意味では究極的なものとも思われる人間理想を抱いて生きている人間なのである。そして，この青年の誠実と迷誤に満ちた体験を跡づけながら，その興味ある人間像を余すところなく活写したところに，この作品の今日でも古びない意味合があるように思われる。

主人公ヴィルヘルム・マイスターの人間性（Persönlichkeit）の中核は，先に暗示したように，その「人間愛」だと言ってよかろうが，外へ向かっては，他者にできうる限り心を開き，内を見つめては，おのが人間の全体の成長を願う，このような人間がこの作品において明瞭な輪郭を持って描

き出されたことは，おそらく，今日の我々に想像し得る以上に，この小説が書かれた当時においては，目をみはる画期的なことであったと思われる。それは，己れを一個の全的人間(ein ganzer Mensch)へと形成するということが，一つの新しい人間理想として衝撃的であったからというだけではなく，この人生目的を表明して，この目的へ向かって生きて行こうとする人間が，一人の「市民Bürger」であったからで，当時の十八世紀ドイツの階級社会においては，ヴィルヘルム自身が言うように，平均的市民の生活目標は，ある技能をみがいて社会に役立つ人間になることであり，ある一つのことに役立つ人間になるためには，「ほかの一切を放棄しなければならず」そこには「どんな人間的調和もない」(五巻三章) と考えられていたからである。

ここで思い出されるのは，最終巻冒頭に見られる，久しぶりに再会したヴィルヘルムとヴェルナー二人の外貌の描写である。ヴィルヘルムの姿は，ここでヴェルナーも一瞬見紛(まが)うほど立派なものに変化している。肥って恰幅もよくなり，物腰には教養のあることが感じ取られるのである。ヴェルナーはヴィルヘルムを前にして，言う，「君の眼は深みを増したし，額も広くなった。鼻も一層上品になったし，口許も一層愛嬌がでてきた。まあこの様子を見てくれ。すべてがなんとしっくりまとまっているんだろう。」(八巻一章) これに対して，ヴェルナーの様子は，一見して「勤勉なヒポコンデリー患者」(同)のそれである。以前よりずっと痩せ，顔はとがって細くなり，頭ははげあがって，声は甲高くなり，進歩したというより，何か後退したといった趣なのである。このあまりにも明らかな二人の対照的な変り様が，彼らの人生態度の相違に基づくものであることは言うまでもない。それは，ヴィルヘルムが己れの内的欲求に突き動かされながら生きてきたのに対して，ヴェルナーは，有能な商人としてただ金もうけ一つに精出してきた結果なのである。

ちなみに，ヴィルヘルムとヴェルナー，この二人は，同じ富裕な商人の跡取り息子として友人同士でありながら，常に対照的な人間として描かれており，「市民」の生き方という観点から見て興味深いものがある。既に少年時代から，「他人の愚行から利益をあげることほど賢明なやり口は，この世にまたとない」と考えて，将来の大商人として抜け目のないところをみせるヴェルナーに対して，「人間の愚行を救ってやることのほうがもっと高尚な満足ではないか」(一巻十章)と思いこんでいるのがヴィルヘルムである。複式簿記こそ人間の知性が考え出した最高のものと考えて，日々の商売の元利合計をきちんと始末していくところに喜びを見い出すヴェルナーに対して，ヴィルヘルムは，「君たちは何か人生の総計といったものを忘れていはしないか」(同) と応ずる。そして，この二人の「市民」は，先にヴィルヘルムの手紙の言葉に見たような，対照的な人生観を持つ人間へと成長して行くのである。

さてもう一つ，この作品の中で特に強く我々の興味を喚起するものがある。それは，ミニヨンと竪琴弾きの謎めいた姿であり，その数奇な運命である。謎と不思議な魅力を宿すこの二人の形姿と運命は，この作品に，ある味わい深い情趣と奥行きとを附与していると言ってよいであろう。この

作品世界は，ほとんど主人公ヴィルヘルムの眼が捉えた限りの世界と言ってよいであろうが，彼の眼に，この二人の人間が深い愛情と強い関心を持って捉えられているということは，注目に値する。それは，この作品において，人間と世界の内にある謎めいたもの，非日常的なもの，その深淵が見逃されていないことをよく示しているからである。最終巻において明らかにされるように，竪琴弾きは，実は，イタリアの貴族であり，かつて，それと知らずに，実の妹を愛し，妻にしようとしたのであった。そして，ここに生まれたのが，ほかでもない，ミニヨンであったわけである。つまり，二人は通常の市民的世界からはみ出した存在なのである。この二人に初めて出会ったとき，ヴィルヘルムは，未だ彼らの運命をつゆほども知らないにもかかわらず，強く心を引かれる。特に，少年とも見紛う少女ミニヨンの姿を，突然目の前にしたとき，彼はこの少女の不思議な魅力に心をうばわれるのである。「ヴィルヘルムの心には，この子供の姿が深く焼きついた。彼は，いつまでも彼女をながめつづけ，ひとことも物を言わず，沈思のあまり，眼の前にいる人たちのことも忘れてしまった」(二巻四章)何故にこの少女の姿がこれほどにヴィルヘルムの心を捕えるのか。その理由(わけ)は明瞭に述べ得ないとしても，ヴィルヘルムがミニヨンの姿に，何か日常性を越えたものを，生の小暗(おぐら)さを垣間見ていると推測しても，的はずれではないであろう。

いずれにしろ，至るところで明晰な言葉を語る理智の人ヴィルヘルムは，一方ではまた，生の深み，人生における異形のものへの鋭く豊かな感受性を備えた人物なのであり，このような人間が歩きまわるこの作品世界は，いわば，「生」そのもののようによくその多面性と深さを示して，意味豊かな世界であると言ってよいであろう。

〔Text〕 Goethes Werke Band VII, Wilhelm Meisters Lehrjahre (Hamburger Ausgabe, herausgegeben von Erich Trunz, Neunte, durchgesehene Auflage, 1977, Verlag C. H. Beck, München)

〔翻訳〕 人文書院版ゲーテ全集第五巻『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(高橋義孝・近藤圭一訳)／潮出版社版ゲーテ全集第七巻『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(前田敬作・今村孝訳)

トーマス・マン『ブデンブローク家の人々』

この長篇小説には「ある家族の没落」という副題がついている。この副題が示すように，これは，十九世紀の中葉，北ドイツのある港町に，大きな穀物卸商を営む一家四代の，最後はこの商会の解体と一家の離散に終る，およそ五十年に渡る物語である。ブデンブローク家は，当初，商人として有能で人間的にもたくましい家長の下(もと)に繁栄を誇っているが，代を追うに従い，次第に文化的に洗練され精神化されて，遂には，この地上の「残酷な生」に立ち向かう勇気を失って，没落していく……

ところで，私はこの本を今から十五，六年前，深い感動を持って読んだことがある。しかし，そのときが既に再読で，最初は――予備校生の時だったと思うが――どこからかこの小説の名作であることを聞き及んで，読んではみたものの，何がおもしろいのやらさっぱり分からず，最後まで読み終ることを唯一の徳として，意地で読み切ったようなあんばいだった。

それから数年後，大学三年生の春休み，私は卒業論文との関係で，もう一度この本を手にした。今度は初めから趣(おもむき)がまるで違っていた。かつて退屈の極みだったものが，なぜ今回はこれほどおもしろいのか。訳者の一人が「櫓(やぐら)の組立てにも似た」と形容する厚みのある文章で，時にイローニッシュに，時にユーモラスに，しかしあくまでも冷静に坦々と綴られたブデンブローク家半世紀の歴史を，この一族の生と死を，私はあわててページをめくろうとする右手をほとんど左手で押(おさ)えるようにして，ゆっくりと読んだ。そして，最終章，トーニ・ブデンブロークが，兄嫁ゲルダとの別離の席で，既に幽明の境を異にした家族を思いやり，「兄さん，おとうさま，おじいさま，そしてほかのみんな！みんなはどこに行ってしまったの？みんなにはもう会えないのね」(十一部四章)と嘆いて，激しく泣いたとき，私もともに泣かずにはいられなかった。感動は深く，私はそれから一週間ばかり，ある名状し難い興奮状態の中にいたように覚えている。

しかし，私がこの作品に激しく心を動かされたというのは，単に，名人芸を思わせる味わい深い文章で美事に描きあげられた一商家の没落の歴史そのものに強い感銘を受けた，ということのみを，意味していない。そのとき，私には，この読書を通して，心中深く思い知らされたことがほかにあったのである。その一つは，人は必ず死ななければならない，という単純な一事である。一商家の五十年に及ぶ栄枯盛衰をながめやって，共感するところの多い幾多の登場人物の生死の有様(ありさま)をつぶさに見つめて，二十二歳の私は，人間はこの世に一度(ひとたび)生まれてきた以上必ずいつか死んでいかなければならないことを，あたかも今初めて教えられたかのように，突然，悟ったのである。ブデンブローク家の主だった人々は既に死に絶え，わずかに生き残った者たちのわびしい別れの宴を描いて，この長い物語に幕が降されたとき，私はいつの日か，同様に，わが家族の死に絶え，己れもまた確実に死んで行く日の来ることを，まざまざと感じて，言い知れぬ深い悲しみと，そして同時に，ある不思議な慰めの気持を味わったのである。

私のこの「死」の認識は，同時にまた，私の「人生」認識の第一歩であった，といってよいかもしれない。私はこの時初めて，人生というものの本当の有様(ありよう)を，いわば「人生の全体像」を把握することができたように感じたのである。つまり，これまで人生というものを，若さ故の性急さから，ただ一方的に「生」の方向からのみ見ていた私は，今，これを「死」の方向からも見る眼のあることを悟って，ここに初めて人生を全的に把握することができたように感じて，感動したのである。

しかし，それにしても，この小説には何とたくさんの「死」が描かれていることであろう！――早くも第二部で手短かに語られる老アントアネット・ブデンブロークとその夫ヨーハンの「安らか

な」死。(妻を亡くしたあと口癖になったヨーハン老人の，あの「奇妙だな……」という独言が，私にはいかにも印象深い。)前半部を締めくくる形で，第五部最終章において描かれるのは，トーマス，クリスティアン、トーニ，クララ四兄妹の父ヨーハン・ブデンブローク領事の死である。領事は未だ老境にあるとは言えず，大商会の信望を担って，日夜業務に励み，休む暇もない。彼はある日，執務中に，仕事机に俯したまま，誰に看取られることもなく，この世を去ってしまう。この二代目ヨーハンの急逝を描く作者の筆は，簡潔を極めているが，逆に，微に入り細をうがって徹底的に描かれるのは，その妻エリーザベトの臨終の様子である。大富豪クレーガー家出身のこの女性は，晩年には敬神と慈善に充ちた生活を送ったとは言え，本質的には「安楽な生活と生活そのものに対して，静かな，自然な，変ることのない愛着」を抱いていて，最後まで「天と自分の強烈な生活力とを和解」させることができない。それ故，彼女の死は，これを見守る子どもたちが正視するに耐えないほど苦しいものとなる。(九部一章) 更に，この物語の主人公トーマス・ブデンブロークの無惨な，しかし，どことなく滑稽な死。歯痛のため，路上で昏倒したトーマスは，泥まみれの，いかにもみじめな姿で家へ運び込まれる。そして，信じ難いことに，そのまま息をひきとってしまうのである。そのため，ブデンブローク市参事会員の死因は一本の虫歯だったとうわさされる。そして最後は，医学書のチフスの症状の説明文にも似た即物的な文章で暗示されるハノーの悲しい夭折……

この様々な人間の死に様こそ，何よりも，若い私の心を捉えて，揺ぶり，人生には「生」の側面のみならず，「死」の側面の不可欠であることを教え諭してくれたものであった。

ところで，大学三年生のときの読書で，深く肝に銘じたことが，もう一つあった。それは，この作品のもう一人の主人公とも言うべきトーニことアントーニエ・ブデンブロークを，作者が——しばしば皮肉や諧謔を交えながらも——実に丁寧に愛情深く描いていることである。それまでの私にとって，トーニのような，自分の家柄を鼻にかけ，虚栄心が強く，上っ調子で，他人の言葉を自分の言葉であるかのように口にして，恬として恥じないような女は，たとえ小説中の人物であっても，関心も同情も寄せることのできない，取るに足りない存在でしかなかった。しかし，今回はまたこの点でも様子が違っていた。開巻冒頭で，まだ小学校に這入るや這入らずの可愛らしい少女として登場し，最終章では，二度の離婚歴を持つ「人生の試練を受けた」六十歳の老婦人になっているこの女性の生涯を，私は今回は深い同情と共感を持って跡づけることができたのである。(ちなみに，トーニは，この物語において，最初から最後まで，全編に渡って登場するただ一人の人物である。)

トーニが，私が先に言ったような，ある意味で軽薄な女であることには，何ら変りはない。しかし，トーニを描く作者の筆は，「他人を裁くな」という神の掟そのままに，決してこれを裁かないのである。むしろ，——書き始めの時点では，たぶん，作者自身が思い設けもしなかったような——ある内的な強い同感と愛着とを持って，この女性の半生を丹念に描いて行くのである。そして，こ

こに立ち現われるトーニの，何と魅力的であることか！何故にか，わが意に反して失敗と不幸とばかりを重ねていく薄幸の女トーニ。しかし，どんな不幸も失敗も決して我身一つのこととして胸のうちに留め置くことができず，いつしか己が自慢，誇りにしてしまうトーニ。彼女は悲しい出来事に出会うたびに，いつも，なりふりかまわず子供のように泣いた。ペルマネーダー氏に裏切られたとき，両親の家が売りに出されたとき，ゲルダとの別れに際して……。幾多の不幸に際会するたびに子供のように泣き，しかし，これを深刻に受け取ることだけはどうしてもできなかったトーニ。この「おろかな」女の何と愛らしいことか！

（作者が最初にこの作品を構想したとき，念頭にあったのは，二百五十ページばかりの中篇小説であり，作者のねらいは少年ハノーを，せいぜいトーマス・ブデンブロークを描くことにあった。それに先立つ「前史」は手短かに片附けられるはずであった。それが思いがけず長いものになった第一の理由は，たぶん，トーニの青春時代が予定以上に詳しく語られたからであろう。第五部において，ブデンブローク家のいわばトーマス時代が始まり，ここから彼がこの物語の主人公として登場するのだが，ここまでの最初の二百ページの主人公は，いったい誰であるかと問われれば，トーニと答えるほかないことを，注意深い読者は気附かれたことであろう。作者は，おそらく，少女トーニを描いていくうち，みずから創造したこの人物に，思いがけず愛着を深めて行き，彼女の人生行路をたどることに，筆を惜しまなかったのであろう。）

さて，私がこのとき，このいささか滑稽で，しかし愛すべき女トーニ・ブデンブロークの半生をたどって，深く肝に銘じたことは，先ほど述べたことと同様に，誠に単純明瞭なことだが，しかし，そのときまで私が本当には決して知らなかった一事，つまり，人間は，どんな人間であろうと，生きて行かねばならないのだ，ということである。人間は，どんな人間も，生きて行かねばならない，それが所謂「おろかな」あるいは「まちがった」生き方であろうとも。人にはしばしば，そういう風にしか生きて行くことのできない理由があるのだ，ちょうどトーニがそうであったように——

私はそのとき，他人を裁くな！と強く思った。その人の生き方が賢明なものであったか，愚かなものであったか，その人生が肯定されるものであるか，否定されるものであるか，それは究極のところ，人間の業を越えた事柄ではないか。他人を裁くな，作者がトーニを裁いていないように。

こうして，この本は若い私にとって，単に一冊の「愛読書」というより，「人生の書」になった。その後も二、三度読み返したように思う。今回は久しぶりにまたこの名作を繙いたのだが，トーニのあのセリフのところに来ると，同じように目頭が熱くなった。

この小説は長年に渡って実に多数の読者を獲得してきたらしい。ある文学案内の書に，既にこれまでに少なくとも百二十万部が売られたと記されている。全く読者に媚び諂うところのないこういう一見地味な作品がこれだけの人気を博してきた理由はどこにあるのであろう。色々考えることが

できるかもしれないが，私は，今回読み返してみて，それは全く単純な理由によるのだと思った。つまり，この小説が読者に人生というものをしみじみと感じさせるからだ。読者は，このドイツ北方の小さな港町に生きた，穀物卸商ブデンブローク一家の半世紀の歩みをともにして，彼らが読者と同じように，人生の各場面で，あるときは喜び，あるときは悲しむ姿を間近かに見て，己(おの)が人生を，あるいは人生そのものを思いやって，これをしみじみとかみしめるのである。そして，これこそ文学作品を読むことの本来の喜びであり，醍醐味ではあるまいか。この醍醐味を十分に満足させてくれるからこそ，この小説は，幅広く根強い人気を博してきたのであろう。

更に，今回読み返して，あらためて感嘆したのは，この，まだ二十代前半にあった作者の最初の長篇小説が，言葉の洗練されていること，表現の的確さ，筋の運びの巧みさ等々，小説技術上の点から見ても，ほとんど完璧な出来栄えを示していることである。例えば，先にも述べたように，この物語の中には多くの「死」が描かれているが，このあまたの「死」が，あるときは簡潔に，あるときは即物的(ザハリッヒ)に，あるときは情感をこめて，あるときは附随的に，あるときは真正面からと，様々に描き分けられて，こういう年代記的物語に附きものの単調な繰り返しを美事に克服している。また，叙述の方法も，客観描写あり，手紙形式あり，モノローグありで，多様な形式が用いられているが，その一つ一つが各場面で生き生きとしたイメージを喚起することに成功していて，読者は，この七百ページを越える長篇に全く退屈する暇(いとま)がないのである。

さて，最後に私は，この物語の数多い登場人物の中で，一人トーマス・ブデングロークについて，若干の言葉を費したいと思う。それは，この人物がこの小説の主人公――少なくとも最も重要な登場人物の一人――と目されるのみならず，私がこの本を初めて読んで以来，最も興味をひかれ，そして打ち明けて言えば，最も共感するところの多い人物だからである。

トーマス・ブデンブロークを特徴づけているのは，彼が一方においては大商会の有能な社主，敏腕の市参事会員でありながら，他方においては，普通の市民の水準をはるかに越えた内省家として，心中ひそかに，人生あるいは人生の意義について深い懐疑の念をいだいていることである。トーマスの外貌には祖父ヨーハンを彷彿とさせるものがあるが，この祖父には人生への懐疑の思いは未だなかった。彼は「現在にしっかりと足を踏まえた」人間で，商人として有能で，次々と大きな成功をかちえて生きた。人生の意味などに思いまどう暇(いとま)はなかった。先代の遺訓「わが子よ，日中は業務にいそしむべし。されど，夜となりて安らかに眠りうる仕事のみなすべし」(二部一章)を信条としていれば，人間として良心の痛むこともなかった。トーマスの父になると，しかし，既に多少事情が違ってくる。代々受け継がれて来た，一家の歴史を叙した家族簿に，最も熱心に書き入れをするのは，この二代目ヨーハンである。彼は，自分の人生の重大な局面では，常に自分がブデンブローク一家という一繋(ひとつな)がりの鎖(くさり)の輪の一つとして生きていることを，強く意識せずにはいられない。

これを彼は決して深く自覚しているわけではないが，しかし，このことは，彼が，近代人の生を特徴づける，人間一人一人が切り離されて生きているという意識を，いやおうなく内部に持ち始めている証左であると言ってよいかもしれない。彼が本当の意味での宗教家ではないにもかかわらず，熱心なキリスト教徒として，信仰箇条の字句に拘泥するというのも，近代人の「己れ一個に差しもどされた生」(ヤスパース)を，無意識に回避しようとしているためとも見られよう。しかし，この二代目ヨーハンにおいては，熱心なキリスト教徒と目端(めはし)の利く実業人とが未だ何の齟齬(そご)もきたさず，むしろうまく一体となって，彼を問題のない人物にしている。

しかし，彼の息子トーマスになると，様相は一変し，何か危機的なものが現われてくる。トーマスの心中には，常に人生に対する懐疑の念が，わだかまっている。しかし，彼は，市民たちの見るところ，あくまでも決断力ある商人，有能な市参事会員であり，またみずからも固くそう信じているので，その結果，彼の自己意識は絶えず分裂せざるを得ない。彼は，晩年のある日，一人みじめな思いで自問する，「私は実際的な人間なのだろうか，それとも繊細な夢想家なのだろうか？」と。(八部四章)この自己分裂の意識こそ，トーマスを若年のころより最も苦しめてきたものであった。トーマスは弟クリスティアンを嫌ったが，それは単に弟が厭(いと)うべき無能な存在であったからではなかった。この地上の「苛酷な人生」と戦うことを避け，繊細な感受性を持ちながらも，あわれな道化として一生を送った弟クリスティアンに，彼は人生に敗北した自己の姿を見たのである。

若くして大商社の社主の座に就いた当初，次々に大きな取引きに成功をおさめ，有力な商人として，多くの同業者や市民の賛嘆を一身に浴びたが，しかし彼は，既に当時から，小さな故郷の町における商人としての己れの活動を，決して何の疑念もなく意味あるものと受取ることができたわけではなかった。伯父ゴットホルトの臨終の場で，トーマスは一人考える，「この地上の一切は比喩にすぎない」(五部四章)と。彼は，ブデンブロークという由緒ある名も，自分の商人としての成功も，教養ある市民としての声望も，故郷の町の小さな世界のことにすぎないことを知っている。しかし，彼がまだ気力もあり，成功にも恵まれていたとき，己れの夢想癖を逆手に取って，「小さな町においてもカエサルになれるのだ」(同)と考えることができた。しかし，成功にも見離され，気力も衰えたとき，彼の分裂した意識は，どこにも安心立命の場を見い出すことができない。彼はある日，ショーペンハウアーの主著に読みふけるという経験をして，その影響によって，一瞬の間，自己の永遠の生を信ずることができるが，しかし，それもたちまち，日常の営為のうちに，雲散霧消してしまう。結局彼は，迷いのうちに，ある日路上で昏倒して，未だ五十代の若さでこの世をあとにする……

この，一方において有能な商人，市参事会員でありながら，他方，繊細な感受性を持った内省家として，自己意識の分裂に苦しむトーマス・ブデングロークの姿は，当時同じような立場にあると感じていた大学生の私にとって強く共感することのできるものであった。人生の意義などに深刻に

悩むことなど決してなく，有用な社会人となるべく，勤勉な，あるいは，怠惰な学生として毎日を送っている同輩たちの中にあって，己れのどんな能力も全く彼らに劣るとは思われないが，どうしても彼らと同じようにふるまえない自分――。当時私は，トーマス・ブデンブロークを，あたかも彼が現実に存在した人間であるかのように，その姿をわが心の中に育(はぐく)み，しばしば彼と対話したものである。

先ほど，この本が幅広く根強い人気を博してきた理由に触れたが，それはまた，この小説が，近代における「己れ一人に差しもどされた生」，近代人の分裂した自己意識の，次第に深刻に，自覚的になっていく様子を，トーマス・ブデンブロークを中心に，美事に描き切っているからでもあろう。読者はこの物語に，十九世紀中葉，ある地方都市に生きた一商家の没落の運命を見るのみならず，近代に生きる人間の，生の様相の推移をも同時に読み取るのである。

〔Text〕 Thomas Mann Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Band I Buddenbrooks Verfall einer Familie, S. Fischer Verlag, Zweite, durchgesehene Auflage, 1974

〔翻訳〕 新潮社版トーマス・マン全集 I 『ブデンブローク家の人々』（森川俊夫訳）

ハンス・カロッサ『ルーマニア日記』その他

カロッサと言っても，最近の学生のほとんどが，名前も聞いたことがないであろう。小島公一郎氏の『ハンス・カロッサ』によると，本国ドイツでも，この作家は，戦後次第に読まれなくなって来ているらしい。「今日（1970年）西ドイツの国語教科書でカロッサの文章をのせているものは絶無である」――そういう報告もあるそうである。しかし，この作家は――本国ではいざ知らず――わが国ではほんの二十年前までくらいは，（ということは，戦後も）広く読まれ，ドイツ語を学ぶほどの者なら，学生時代に教室でこの作家の作品を読むということも，まれではなかったようである。

私自身は三十を過ぎて初めてこの作家を読んだ。たいへん遅い出会いである。早く読んでおけばよかったという気もする。カロッサ自身の大学時代を描いた『美しき惑いの年』を，自分も大学生であった時に読んでおれば，きっとまた違った感想を抱いたであろう。しかしまた，ちょうどよい時に出会ったのかもしれない。それというのも，この作家の作品を理解するのに，困難というほどのことは特にないとしても，その勁(つよ)く静謐な筆致を，また，「叡智」とすら言いたいその人間と世界に対する深い洞察を味わうには，多少とも読者の成熟を必要とするように思えたからである。

いずれにしろ，このような作家が，現在本国でもわが国でも全く顧みられていないというのは誠に残念な気がする。ハンス・カロッサという作家の存在を知って，学生諸君の誰かが自分も読んでみようという気になられたら幸いだと思い，以下に紹介とも雑感ともつかぬ一文を綴ってみた。

初めに，カロッサの年譜を見て，紹介しておいた方がよいと思われることを，二、三手短かに記(しる)してみる。

生年は1878年（明治11年）である。これは，この作家が，日本でよく知られているドイツの大作家・詩人たち，トーマス・マン（1875年生），リルケ（1875年生），ヘッセ（1877年生）等と同世代人だということであるが，それはまた，未だ十八，九世紀のヨーロッパの精神遺産を総身に受けて育った世代であることを意味している。マン，ヘッセと同様に，カロッサの最高の「師」はゲーテであった。

履歴で最も注目すべきは，この作家（詩人）が，一方においてまた医者でもあったことであろう。医学部に通っていた学生時代，若いカロッサは，自分は詩人であり，医学は二義的なもの，と思っていたらしい。しかし，学校を出て，医業を始めてみると，この仕事が，詩人であることと同様に，最高の人間的誠実を要求するものであることを知らねばならなかった。医業の放棄ということを何度も考えたらしいが，詩人であり医者であることに深く苦悩しつつ，結局五十一歳の年まで開業医であり続けた。彼は医者としても傑出していたらしく，ある時期カロッサの診察を受けたことのあるリルケは，この深く人間を知った医者に出会えたことを，何にも増して喜ばしいことの一つとしている。カロッサが作家であるとともに，医者でもあったことは，言うまでもなく，作品のテーマに，素材に，決定的な影響を及ぼしている。

さて，ここでもう一つ言っておかねばならないのは，この作家の散文作品の多くは所謂自伝小説だということである。カロッサは，例えばトーマス・マンにおけるような，壮大なフィクションを造形する力は本来なかったのかもしれない。しかし，そのことは，だから彼は自伝小説を書いた，ということを意味しない。彼は若年のころから詩を書き，そして，生涯詩を書き続けた。処女出版も1910年，三十二歳の時の「詩集」である。ハンス・カロッサはまずはじめに詩人であったと言わねばならない。一方，自伝小説は，この詩人が最初から計画して書こうとしたものではなく，いわば彼の内部から自然にほとばしり出てきたものなのである。1914年の対露宣戦布告がなされてからまだ幾日も経(た)たぬある日の夜，三十六歳のカロッサは，スパイとして射殺された男の死体の検視を終えたのち，疲れた身体をひきずって，何か暗い気持で河辺をわが家へと急いでいた。と，突然，遠い幼年時代の一齣(こま)が，眼前に見るかのように生き生きと蘇ってきた。一齣は次の一齣へと続いた――。その時，彼はありありと過去の姿を見，同時に，この蘇った過去の姿を通して人間存在の意味合を感得して「幼年時代」を書いたのである。カロッサの自伝文学は単なる過去の追想ではない。それは，過去の姿とそこに生きる人間の存在の意味が同時に感得されるようなある「何か」である。

今回私が読んだのは『幼年時代』『青春変転』『美しき惑いの年』『ドクトル・ビュルゲルの運命』『ルーマニア日記』の五篇である。どの作品も何か微光を発しているような，よく抑制のきいた筆

致に貫かれていて，読む者の気持を引締めると同時に，あるおだやかさをもたらす。作者は『美しき惑いの年』の中で「芸術作品には私たちの内部にある〈人と結ぶ心〉を強めてくれるものと，私達を個別の境地に誘いこむものとがある」と言っているが，カロッサ自身の作品はどれもこの前者に属するものと言えるだろう。

この五篇の自伝的作品を読んでまず気づくのは，どの作品にも，悪党や悪人は言わずもがな，一方的に否定的に描かれたような人物は一人も登場しないことである。このことを別の言葉で言えば，カロッサ文学の世界は，対立や否定の世界ではなく，融和の世界であるということである。この我々の対立と否定の時代に，こういう作品世界が存することを思うと，これは，既にこれだけで何か特筆すべきことのように私には思われる。この作家の精神の眼には何事をも治癒する力が宿っていて，この精神の眼に見られた人物や風景は，すべて深く癒されて，ある犯しがたい，おだやかで意味豊かなものへと変容するかのようである。しかしながら，誤解してならないのは，このことは，この作家が殊更に物事の悪しき面を見逃し，肯定的面のみを見ようとしているのではない，ということである。そういう感傷はこの作家にはない。そうではなくて，それは，事件や事物のうちに在る人間的側面を決して見逃さない，忍耐強い，注意深い眼なのだ，ということである。このことを最もよく示しているのは，戦争文学の一つの記念碑的傑作『ルーマニア日記』の中にあるあの少年と仔猫のエピソードであろう。多少長いが，引用してみる。

《今日の正午，わたしはある場面の目撃者となった。(……) 数週間以前，この家でたくさんの猫が生まれた。家人がそれを今では荷やっかいにしていた。ことにそれらの猫の仔にやる牛乳がなかったからだ。このうちに働いている十五歳ぐらいの少年が，このあり余る猫の始末をつけろといいつけられたらしい。少年が中庭越しに仔猫を運んで行くのを，わたしは自分の部屋で書きものをしながら見ていた。どうするつもりだろうと思っているうちに，少年は仔猫を一つずつ信じられないほどの素速さで納屋の壁にたたきつけ始めた。投げつけられた仔猫たちは壁の前に死んでたおれていた。小僧はいつものように腕をふりふり口笛を吹きながら台所へ引き返して行った。台所ではちょうど食事がだされていた。小僧もほかの連中の仲間入りをして，のんきに食事していた。ところが処刑された仔猫のうち，顔と胸と足が白く，首に明るい銀色の毛がはえている灰白色の，ほかのとは全然ちがった一匹は気絶しただけで，次第に生き返ってきた。その仔猫はよろよろと小きざみに歩こうとし，立ちどまって，二，三度前足で耳のところをなでた。そうすれば正気に立ちもどれるとでもいうような様子だった。それから中庭を横切って家の中へはいってきた。その時になって初めてあごのところに血が流れているのがわたしの目にとまった。そのほかは別にどこもけがをしてはいないらしかった。仔猫はためらいがちに台所のドアから中へ行ってきて，あたりを見回した。食事中の人間を見ると，仔猫は一生けんめいになってベンチに飛びあがろうとした。二、三度やっ

たあげく，遂にそれが成功した。それからしばらく仔猫はじっとしていた。そのうち仔猫はうまそうに口を動かしている自分の殺害者のひじに，親しく哀願するようにすりよった。(……)小僧は仔猫を認めた時，最初はまだそのまま食事しつづけていたが，突然嘔気(はきけ)と戦うようなふうを見せ，しゃっくりのようなものがではじめてスプーンを投げだしてしまった。ほかの者が立ち去ってしまうと，仔猫をおそれるような，そこにそうして生きていることを疑うような様子で，用心深くなでてやり，最後には自分にでさ〻かぎりの慎重さで，まるで瀬戸物出来の置き物を扱うような手つきで仔猫をテーブルの上にのせて食べ残しの肉とパンとをちぎってやった。仔猫はそれを少しばかり食べた。それが彼をひどくよろこばせた。主婦がはいってきた時，小僧はひどく熱心に何事か主婦に話しだした。マチュカという言葉がたびたびきこえた。そういいながら彼はそのつど仔猫の方を指さした。主婦は黙って仔猫を見て，また部屋をでて行った。それから小僧はまた中庭での仕事にもどって行き，死んだ猫の仔を生きていると同じように用心深く拾い上げて，どこかへ持ち去った。人柄が少し変わったように思われた。顔つきがはっきりとしてきたし，歩き方もしっかりとしてきた。この時以来，この少年が口笛を吹いているのをきかなかった。》

見るべきものが見られ，そしてそれが，性急な判断や意見を全くさしはさむことなく，沈着とも言うべき落ちついた文章によって的確に描写されている。何度読んでも飽きない箇所である。作者の注意深い眼は何かをことさらに見ようとしているのではなく，己(おの)が前の少年と仔猫の動きを静かにとらえて，それを一語の無駄なく描写することによって，いわば出来事自体にその意味を語らせ，これだけを取り出せばさしたる印象もなく見逃される場面を，我々すべてにかかわる，一つの忘れがたい意味深長なエピソードへと仕上げるのである。

初めに書いたように，この作家は，現今，本国ドイツにおいても我が国においても，それほど読まれていないようである。察するに，カロッサ文学の「隔和の世界」，この作家の地味で，控え目で，肯定的な姿勢は，現在の「複雑な」世界においては，「アクチュアル」な意味を失ったということで，顧みる人が少ないのだろう。それはそれでよい。多くの人が好むのは，目立(だ)たしく分かり易いものである。加えて「現代的問題」でも捉えて，威勢のよい批判でもくわえていれば，読者，特に若い読者の注目を集めることができるだろう。ハンス・カロッサにはどんな意味でも派手なところがない。それに，彼が書くに値すると思ったものは，決して所謂アクチュアルな事柄ではなく，いわば古典的人間事象であったといってよいだろう。

ここで，いかにもカロッサの作風と人柄とを思わせる場面を引用してみたい。これも『ルーマニア日記』の一節である。

《ハンガリー軍の観測将校がわれわれの仲間に加わった。しまいにわたしとハイラー中尉とが彼の観測地点に招待されて，お茶をごちそうになった。鋏状観測鏡ものぞかせてもらった。(…)わたしは観測鏡の中に，灌木のおい茂った小さな石だらけの丘を見つけた。大きな樹木はほとんどはえていない。小さなねじをまわすと，突然たくさんのルーマニア兵を発見した。杜松のやぶかげで塹壕を掘っているのだ。観測将校に教えてやろうかと思ったが，何者かがわたしをおしとどめるような気がして黙っていた。初めてわたしは人を殺す義務の前に立たされることになった。なぜかといって，相手を見のがせば，つぎの瞬間，やられるのはこっちである。しかし向こうの方で塹壕掘りをやっている連中は，この小さなレンズの中にとらえられて，いわばわたしの掌中にある。ひとりは今まさにパイプにたばこをつめているし，他のひとりは水筒の水を飲んでいる。みんな知らぬが仏で安心しきっている。わたしがもらさぬかぎり，みんな無事なのだ。——軍人ではなくて，自分自身とどうにかこうにか平和に暮らしてきたわたしごとき人間にとっては，これは奇妙な状況にちがいなかった。心臓がどきどきし始めた時に，かなり年輩のボスニアの大尉がやってきた。昨夜休暇から帰来した彼は，活発なおしゃべりでみんなの注意を自分の上へ引きつけたので，魔法の望遠鏡のことはすっきり忘れられてしまった。》

ここに描かれた数瞬のカロッサの態度を，ある種の人々は，おそらく，なまぬるい平和主義と非難するであろう。一方，所謂平和主義者は，消極的だがともかく無惨な殺戮に対する抵抗の姿勢として，何がしかの評価をするかもしれない。どちらもまちがっていると思う。いったい，こういう類の人間的状況における他者のふるまいを示されて，人がそれを非難したり評価したりするというその態度自体が，私には理解のいかぬことである。『ルーマニア日記』全篇を読めば，この軍医が猛勇の武人でもなければ，繊弱な「平和主義者」でもないことは一目瞭然であろう。彼はあらゆる場面で，自己のできうる限りの力で，平常心を失わず，有能な軍医，一個の人間たらんとつとめている。この場面でもまたそうなのだ。彼は言う，「何者かがわたしをおしとどめるような気がして黙っていた」と。ここには，人間を越えた「何者か」の声を聞く自覚した人間がいる。そして，この「人間」はこの何者かのうながしに従いながら，その瞬間の状況の推移に身をまかす。ボスニアの大尉がはいってきて，皆の注意を引きつけ，望遠鏡のことは忘れられる。自然の成り行きである。是も非もない。状況のとりこにならず，しかも己れが眼前の状況から完全に自由でないことを知っている人間，作者はここでそういう人間を描いている。そういう人間の数瞬の姿を，ここでもまた，この場面自体にその意味を語らせるかのように，描いている——これがカロッサの作風であり，ここに，この作家の人柄がよく現われている。

〔Text〕 Hans Carossa Sämtliche Werke I Band, II Band, Insel Verlag, Unveränderte Nachauflage, 1978

〔翻訳〕河出書房『世界文学全集30　カロッサ』(手塚富雄・高橋義孝訳)

エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』

『飛ぶ教室』は今から五十余年前，1933年に発表されたものだが，これは今も少年文学の傑作，否，最高傑作の一つに数えてよいものであろう。全篇，文学作品の名に値する歯切れのよい生き生きした文章で貫かれ，何よりも，児童文学に通弊の子供だましの退屈な空想や嘘が全くなく，人間的真実にあふれている。私は一読，再読して誠にすがすがしいものを感じた。

しかしながら，それはまた，ここには全く子供だましの嘘が書かれていないからというだけでなく，もっと積極的に，作者が一個の成熟した大人として，この「子供のための長篇小説」において，自分の考えや人生観を一文の値引きもなく，だれ憚るところなく吐露しているからでもあろう。例えば，「第二のまえがき」で著者は，「子供というものが極上のお菓子のこね粉で出来ているかのように」初めから終りまで甘く楽しい話ばかり書いている童話作家に腹を立て，「子供も時にはずいぶん悲しく不幸になることがある」と主張して，こう言うのである。

《子供の涙は決して大人の涙より小さいものではなく，大人の涙より重いことだって，めずらしくありません。誤解しないで下さい。皆さん！私たちは何も必要以上に涙もろくなるには及びません。私はただ，つらい時でも正直でなければならないというのです。骨の髄まで正直で。(…)

皆さんは，ボクシングの言葉をかりると，防御の時も，ふんばらねばなりません。パンチを忍んで，こなして行く修業が必要です。世の中というものは，とほうもなく大きなグローブをはめていますよ。皆さん！それに対する覚悟ができていないで，一発食らうと，小さい家バエがせきをしただけで，もうばったりのびてしまいます。そこで，元気を出し，不死身になるんですね！それを心得た者は，もう半分勝ったようなものです。そういう人はあまんじて打たれても，沈着さを失わず，勇気とかしこさをあらわすことができます。私が今言うことをよく頭に入れて下さい。かしこさを伴わない勇気は不法です。勇気の伴わないかしこさは無意味です。世界史には，ばかな人が勇ましかったり，かしこい人々が憶病だったりした時がいくらもあります。それは，正しいことではありませんでした。》

これを説教というなら，何とも気持のよい説教というほかはない。

このように作者が作中に顔を出して（今，引用したのは「まえがき」からだが），遠慮会釈なく自分の考えや意見を述べていくというのは，この作家の一つの特質でもあり，大きな魅力にもなっているように思われる。いま引いたところからも分かるように，年少の読者には十分な理解がいくだろうかと思われるような内容も，決して割引きすることなく語りかけて行くのである。子供の理解力を忖度して，安易に薄められた言葉ばかりが氾濫する中で，ケストナーの一語一語の何と潑剌と

して，真実なことであろう。

ちなみに，この特質と魅力とを最もよく発揮しているのは，『飛ぶ教室』より更に『点子ちゃんとアントン』であろう。この作品においては，各章に「反省」なる部分が設けられていて，いま物語られた内容に対して作者自身が注釈を加え，自分の考えや意見を述べるのだが，この部分の著者の言葉には誠に味わい深いものがあり，「反省」のページは，単なる物語の附加部分ではなく，物語全体を更に内容豊かにしているのである。

さて，『飛ぶ教室』は，五人のギムナジウム生徒を主人公にして，彼らが自分たちの学校と寄宿舎を舞台に繰り広げる様々な出来事を描いたものだが，この学校小説の傑作たる所以は，ここに描かれた四日間の出来事がいかにもおもしろく，生徒たちや学校の様子をよく伝えているからというのではなく，そうではなくて，ここに，人生の大事，人生の理想が間然するところなく語り切られているからである。

例えば，クリスマスの祝いの席で「校舎の土台のように，雪にとざされた校庭の古木のように，この学校のものになろう」と誓ったベク先生の生徒たちへの深い愛情は，学校というものが存在する限り，生徒というものがいる限り，やはり教師の理想であり続けるものであろう。あるいはまた，一方では「いやけがさすほどの勉強家」といわれながら，他方では「誰知らぬものもない不正に対するかんしゃくと正義感」の持ち主「ヨーロッパの秀才」マルチン・ターラー生徒の人間像は，いかにも魅力的で，こういう少年の存在を知った読者の心を，ある高みへと強く引き立てるものがある。「臆病」という性格に対するちび助ウーリ・フォン・ジンメルンの悩みと，級友一同の度胆を抜いた落下傘降下による彼の「自己克服」も，自己確立への道を歩み始めた少年たちの生活に不可欠の人生の大事を，一つ描いたものと言うことができるであろう。そのほか，このウーリと，ボクシング世界チャンピオンをめざすマッツこと，マチアス・ゼルプマンの奇妙で愉快な友情，敵将エーガーラントの恥を知ったふるまい等々，この作品には，この上なく貴重で忘れ難い場面が数多く活写されている。

しかし，ここであらためて思い出されるのは，物語も終り近く，今はヨハン・ジギスムント・ギムナジウムの校医になった「禁煙先生」が，全生徒に向かって呼びかける次の言葉である。

《どうか諸君の少年時代を忘れないように！》

これはまた，作者の読者へ向かっての最も熱い願いでもあったろう。

《皆さんの子供の頃を決して忘れないように！》

作者は「第二のまえがき」の中で同じことを言っているのである。それは，禁煙先生が言うように，現在子供である生徒たちに向かって言われても「全くよけいなことではない。」なぜなら，私たちはあまりに容易に自分自身の少年時代を忘れてしまうからであり，そして，この少年の日々にこ

そ，「人生における本当に大切なもの」（禁煙先生）が，人生の理想が，今出たばかりの端々しい若芽として，存在しているからである。

ところで，どんな作家も多かれ少なかれ己れの作品に自分自身の体験を盛り込むものであろう。否，現実にか，あるいは，精神的な意味においてか，身を持って体験されなかったような事を書くなどということは，少なくとも真に作家の名に値する者にとっては，全く無意味なことであろう。しかし，そうではあっても，それらの体験の切実さ，深刻さには，おのずからそれぞれに深浅，軽重，濃淡がある。

この作品を最初に一読したとき，実のところ私は，第九章のマルチン・ターラーの母親宛の手紙の段にさしかかって，涙があふれ，とまらなくなってしまった。半給費生マルチンのところにも，他の同級生同様に，クリスマスの二日前には，母親からの待ちに待った便りが届く。しかしそれには，故郷までの旅費八マルクにも満たぬ，わずか五マルク相当の郵便切手しか同封されていなかった。父親が失業中で，母はどうしても八マルクのお金を工面することができなかったのである。マルチンはクリスマスにも両親のもとへ帰ることができなくなってしまった。母は息子に書く，「愛するマルチン，クリスマスには，私たちは，ほんとうに元気を出し，決して泣いたりなんかしないようにしましょう。私はお前にそう約束します。お前も私に約束してくれますか？」しかし，母が泣きに泣いたことは，手紙のインクが至る所にじんでいるので，よく分かるのである。息子は母に書く，「愛するやさしいおかあさん！お察しの通り，ぼくは胸をつかれました。でも，どうにも変えられないことですから，仕方ありません。ぼくは少しも泣きませんでした。ただの一滴も。」しかし，「泣くのは厳禁」といくら頑張ってみても，マルチン生徒はやはり泣かずにはいられなかった——

さて，このマルチンの母親宛の手紙の段に来て，私が言わばこの少年の悲しみをわが悲しみとして泣かずにいられなかったのは，決して私の感傷ばかりではない。マルチン少年とその母親の関係は，表向きには何ら特別なところのない，貧しい家庭の母と息子の関係のように見えるかもしれない。しかし，ケストナー描くところの気丈で優しい母と利発でけなげな息子，この両者の間には，疑うことのできない真実の人間感情の流れが感得されて，胸打たれるものがあるのである。注目すべきことに，作者はこの『飛ぶ教室』の中で「母と息子」という人物設定を実に三度も用いている。（「まえがき」と「あとがき」における作者とその母親。ベク先生の思い出話の中における少年ベクとその病身の母。そして，マルチンとその母。）更に『点子ちゃんとアントン』においても，アントン少年は，マルチン・ターラー同様に，貧しい家庭の利発でけなげな息子であり，母親も同様に病身だが気丈で優しい人柄として描かれていることを思えば，ケストナーにおいて，この「貧しい家庭の気丈で優しい母と利発でけなげな息子」という人物設定は，この作者の最も切実な，最も深刻な自己体験の表現であろうことが推測されるのである。

そして私はのちに，ケストナーの少年時代の体験を綴った『私が子供だったころ』を読み，この推測の正しかったことを知ったのである。

ケストナーは貧しい家庭の一人息子だった。両親ともケストナーを愛したが，職人であった父はなぜかその存在が希薄だった。お母さんは，頭のよい，しっかりものの，気強くやさしい人だった。そして，どうやら両親の間には，心の通い合いがなかった。夫が与えてくれる以上のものを人生に求めた母親は，息子のために生きようと決心した。ただ息子のためだけに生きようと決心した。そして，母と息子の間には心の通じ合いがあった。(この強い母子の結びつきは，言うまでもなく，一個の男子たるケストナーにとっては，一方で難しい問題をはらんでいた。)『私が子供だったころ』によると，ケストナーはまたちびでもあり，成績抜群の優等生でもあったらしい。察するに『飛ぶ教室』に描かれている多くの事が作者自身の体験によるものなのだ。

そして，そういう現実の深刻な体験に裏打ちされているからこそ，この小説は，少年文学とはいえ，無意味な子供だましの空想や嘘に無縁で，真実味にあふれた内容豊かな作品になり得ているのであろう。

〔Text〕Erich Kästner : Das fliegende Klassenzimmer Ein Roman für Kinder, Cecilie Dressler Verlag, Hamburg, 1984

〔翻訳〕岩波書店版『ケストナー少年文学全集 4　飛ぶ教室』(高橋健二訳)

附記

作品からの引用は主として上に〔翻訳〕として挙げたものによったが，論述の都合上変更を加えた部分があることを，お断りしておく。また，これは所謂学術論文ではなく，エッセー風の文章なので，「註」は一切附けなかった。

こういう文章を書き，ここに掲載してもらったについては，若干の理由がある。——この数年来「ドイツ文学ゼミナール」を担当しているが，このゼミナールにおいて学生は例年二回ほど，授業中に取り挙げた作品について感想文を書かねばならない。そして，この感想文を読んで，気附かずには済まないのだが，作文の極端に下手な学生が実に多いのである。これが本当に大学生の書いた文章だろうかと情けなくなるようなものが大半である。そこで私は毎度，学生の作文を徹底的に添削し，そののち，学生と一対一で，どう書いたら上手に書けるかを話し合うことにしている。学生はこのあとでもう一度書き直さねばならない——こういうことを，この数年，繰り返している。ところで，この作文指導の際，大事なことの一つは，学生によき実例を示してみせることではないか，と私には思われたのである。その理由を述べる余裕はここにはないが，ともかくそのように考えて，

模範文を書いてみようと試みたものが，ここに示した文章である。無論，よい手本には全くなっていない。下手な「論文」よりむしろこちらの方が難しい，とすら感じている。学生に，これが大学教師の文章かと逆に笑われそうである。しかし，私にはこういう努力は，この教養部においては，今後ますます必要になってくるように思われるのである。専門研究家としての「論文」を書くことは，無論，我々の大事な責務だが，教師としての，学生を念頭においた努力も欠かせないように思うのである。そして，今後はそれを「形」にして残して行くことも大事なことだと考えたので，今回，これまでに書いたものをいくつかここに掲載してもらうことにした。